

アカデミック・スキルとしての「身体知」 —慶應義塾大学での実践—

横山千晶
慶應義塾大学

慶應義塾大学の横山でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私が担当する事例は、〈演劇〉的な要素も含めた「身体知」です。

最初に、本日お話しする内容について簡単にご説明します。まず、学生の「理解」について考えたいと思います。授業で学んだ内容や読んだ本の内容、あるいは見たり聞いたりしたことを、学生は本当に理解しているのだろうか、ということです。これは、私たち大学教員が共通して常に抱えている疑問ではないかと思います。学生の抱える理解についての問題、これを解決するために本学が取り組む「身体知プロジェクト」の骨子と、その実践内容をご紹介します。

初年次教育だけでなく大学教育全体を通して育成すべき学生の知力を考えようと、本学では2007年7月に教養研究センターを日吉キャンパスに設置しました。私は2004年から3期、計6年にわたって所長を務めました。その間、学生が理解するとはどのようなことを考え続けました。その発端は、「読んだ本の内容をしっかりと理解できていない気がする」という学生の声を複数聞いたことでした。授業で先生に指定された本を読み、レポートなどに筆者の考えをまとめることはできるけれど、筆者の考えを腑に落ちて理解できてはいないと思う。そう話す学生が多かったのです。

この要因を突き止めようと、学内で何人もの先生方に伺ってみたところ、近年の学生の課題として次の三つが浮かび上がりました。一つ目は、表現力の低下です。理解したことを自分の言葉に置きかえて表現できない学生が増えているというわけです。これには、視覚情報に頼り過ぎ、見たことと理解したことを混同してしまう学生が増えていることと関係があると考えられます。二つ目は、「腑に落ちる」という感覚の欠如です。新たに知識を得たことに感動はするものの、「良かった」の一言で終わってしまうようです。三つ目は心と体の問題で、他者との衝突を避けるために、自己主張、セルフ・アサーションをしなくなっているということです。これは、自分の考えをうまく表現できない、伝えられないもどかしさとも関係があるでしょう。

ここで、理解するとはどういうことを検討してみましょう。理解に至るためには三つの段階があると、私たちは考えています。1段階目は、自己と向き合うということです。他者の主張の意味がわかるだけではなく、その主張に対して自分はどうか考えるかを明確にできなくてはなりませんから、まず自己と向き合う必要があります。2段階目は、他者と向き合うことです。具体的には、自分の考えが他者の考えと違ったときに、自分の考えをはっきりと示すことを指します。他者の考えにただ反発するだけでも、ただうなずいてやり過

ごすだけでもなく、自分の考えとの相違点を明らかにしながら、一致点も見いだし、どこかで折り合いをつけることが求められます。3段目は、自分の考えと他者の考えとを総合し、新たな考えを生み出すことです。理解できないという現象が生じるのは、この3段階のどこかでつまづいているためだと考えられます。もっとも、この3段階を踏むことは簡単なことではないと思います。私も、自分という人間がわからなくなることはよくあります。自分とは、最も身近な他者だからでしょう。

理解という行為が私たちの考えたようなものならば、今後のアカデミック・スキルとして、1) まず自分の意見を持ち、2) 衝突を恐れずに意見をぶつけ合って一致点を探り、3) 他者と協同して解決策を見いだす、この三つのスキルを育成することが大学に求められるでしょう。別の言葉で言い換えると、1) 論理 Logos, 2) 感情・感動 Pathos, 3) 共感・倫理 Ethos ということになるでしょう。この三つをつなぐものとして、私たちは「身体知」という概念を提唱しています。

先ほどお話ししたように、本学の教養研究センターは2002年7月に日吉キャンパスに設置され、研究と実践を行っています。センターは経済学や商学、法学、政治学、文学、理工学など、さまざまな専門分野の教員で構成されています。ちなみに、私の専門は英文学です。

「身体知プロジェクト」は、私が同センターの所長を務めるようになった翌年、2005年に始まりました。座学でただ知識を身につけさせるのではなく、学生に「腑に落ちる」という感覚を持たせることがその目標です。まず、自分と向き合い、自分の中で衝突を起こし、次に他者と衝突する。そして、自分の考えと他者の考えとを融合させ、新たな知見を得る。そのためには、身体と感情の両方を鍛える必要がある。私たちはこのように考え、考えを実践しようと、実験授業に取り組みました。事前に臨床心理学や社会学など多方面の研究者を学内外から招いてアドバイスをいただき、事後には実験授業を受講した学生に対するアンケート調査なども行いました。理論に基づく教育モデルを研究し、カリキュラム化しようとしたわけです。

その際私たちは「身体知」に三つの軸を設定しました。

第1の軸は、言語—非言語です。私たちは、普段、情報のやりとりに言葉を最も多く用いています。読書にしてもプレゼンテーションにしても、情報は言葉によって得られ、また伝えられます。ただ、非言語によってやりとりされる情報もたくさんあります。たとえば、芸術作品によって感動を得る場合です。ここで感動の媒介となるのは、見たり聞いたり触れたりといった行為でしょう。先ほどの銅金先生のお話にあった「京造ねぶた」作りの感動も、非言語によるものだと思います。

第2の軸は、視覚—非視覚です。視覚を通して得る、もしくは伝える情報も、非常にたくさんあります。たとえば、私は今、プレゼンテーション用ソフトを用い、皆様の視覚に訴えて情報を伝えていますし、銅金先生が先ほどご紹介された動画からはさまざまな感情が伝わってきました。ただ、匂いや気温といった非視覚による情報のやりとりも少なくありません。特に嗅覚は、記憶に非常に強く作用する感覚であると聞いています。

第3の軸は、場と時間の共有です。情報通信技術が発達した近年、学生は無料通信アプリケーションを頻繁に用いているようすし、私も学生のレポートや論文の指導をメールで行うことが増えています。顔を合わせなくても、他者と情報を交換しやすくなっている

昨今です。そんな時代だからこそ、同じ場所と時間とを他者と共有しながらやりとりをすることの大切さを、改めて見直す必要があると考えます。これは、相手が首をかしげていたら、自分の伝え方が不十分だったと考えて伝え方を変えるなどといった、他者の反応に応じたコミュニケーションの仕方を習得させることにもつながるはずです。

続いて「身体知」のメソッドを考えました。以下の三つです。

一つ目は、衝突、コンフリクトをつくり出すことです。学生が、まず自分と、次いで他者とコンフリクトする場を設けます。自分とのコンフリクトは、たとえば、「今読んだ本の内容を躍りて表現しなさい」という指示を突然出されたとしましょう。ここで学生の感じる戸惑いによって自分の中に大きなコンフリクトが生じます。その学生は、「どうしたら良いだろう」と悩みながら、今まで経験したことのない自己表現と向き合い、踊ってみたら気持ち良かったというように、新しい自分とも出会うことになるはずです。他者とのコンフリクトでは、自分の意思をどのように他者に伝えるか、試行錯誤しながらノウハウを学んでいくことでしょう。

二つ目は、コンフリクトの後で、共感の場を設けることです。協同による新しい表現を創作し、発表する機会を作るわけです。

三つ目は、コンフリクトから共感に至る過程を意識させることです。そのために、ポートフォリオを活用しています。

ここで「身体知プロジェクト」による実験授業の取り組みを具体的にご紹介します。2006年度に、最初の実験授業「体をひらく、心をひらく」を始めました。その目的は、自分に合った表現の仕方や他者と意思を疎通させやすい表現の仕方を、学生に見つけさせることです。そこで、さまざまな表現を体験できるように工夫しました。たとえば、物語を読み、その内容をコラージュやダンスなどで表したり、黙読だけでなく、音読・朗読することで声の持つ力に注意を促したりといった具合です。実験授業の告知ポスターを通して学外にも広く参加を呼びかけた結果、学生だけでなく、他大学の先生や慶應義塾内外の小・中学校や高校の先生方も出席してくださいました。

「体をひらく、心をひらく」では、臨床心理学の研究者を招き、毎回の授業を観察していただきました。授業で意図的に設定した自己や他者との衝突、コンフリクトが、授業後にも尾を引くといったトラブルを防ぐためです。また、表現が秘めている恐ろしいほどの力に気づかせることにも力を入れました。たとえば、テロ集団が自分たちの思想を宣伝する映像には、発せられるスローガンや音楽を巧みに用いたものがあります。安易に操作された結果、その集団の思想に何となく共感するような気持ちになり、繰り返し触れていけば、知らず知らずのうちにその思想に魅了されてしまうことになりかねません。つまり、表現は、そのやり方によって特定の考えを他者にすり込む、いわば他者を洗脳するだけの力があるということです。今までの世界の歴史を見てきてもそれは明らかでしょう。音読・朗読などを通して声の力に注意を促したのも、表現の持つ力の怖さを知ってほしいという思いがあったからです。

2007年度からは、「体をひらく、心をひらく」と並行して、新たな実験授業「新しい文学教育」も行うようになりました。2006年度の「体をひらく、心をひらく」で試みた多様な表現を、文学の授業に応用しようとしたのです。

「新しい文学教育」は、夏休み中に1週間実施する集中講義で、文学の授業を担当する先

生方と「体をひらく，心をひらく」の講師陣とがチーム・ティーチングを行いました。通信教育課程を履修する，いわゆるマチュア・スチューデントにも声をかけ，さまざまな学年・年齢層の学生が計およそ30人出席しました。教材には，D.H. ロレンス『チャタレー夫人の恋人』や南アフリカのノーベル賞作家J.M. クッツェーの作品，私の専門である19世紀のイギリスの文学作品などを用いました。

「新しい文学教育」では，身体感覚をリテラシー教育につなげることを目指しました。まず，黙読するときとの感覚の違いを意識させようと，音読を重視しました。授業の流れとしては，最初の何コマかには座学を入れ，教材とする文学作品についての概要のほか，現代思想的なものの見方や文学理論的なテキスト解釈術などを説明してから，徐々に「身体知」的な活動を増やしていきました。すると，指導教員にもわからなかったようなサブテキストが浮上してきました。これは，身体感覚によって作品を読み込んで初めてわかるもので，学生の自己表現による読み方と言えるでしょう。

2008年での授業を紹介しましょう。私は19世紀のイギリス文学を専門に研究しています。中世イギリスの農民一揆を題材としたウィリアム・モリスの小説『ジョン・ボールの夢』を以前翻訳していたので，これを教材に用いました。身体を通して読むためには，少なくとも入門段階では感情移入しやすいテーマの作品を選んだほうが良いので，21世紀の若者にも共感できるように，仲間とのつながり(fellowship)が最も重要なテーマとなる作品を選んだのです。座学では，ストーリー・テリングや中世ヨーロッパに特有のバラッド，一揆の指導者ジョン・ボールによる演説など，作品の中に出てくるさまざまな言語表現の可能性について解説しました。「身体知」的な活動では，作中に登場するアーチェリーの体験のほか，アーティストや歴史学研究者，音楽研究者，体育教育学研究者とのコラボレーションのもとに授業を進めました。

ご覧いただいている写真は，さまざまな専門分野の先生方に参加していただき，歌をつくったり，演説の練習をしたりしているところです。

1週間の集中講義の最後の授業では，発表を行いました。まず個人発表，次にグループ発表です。個人発表は演説や講談など形式を自由に決めて行う，いわば個人による自己表現。グループ発表は集団による創作表現です。自分一人で作り上げる発表と他者と力を合わせて作り上げる発表，この2種類の発表を必ず体験してもらいました。

実験授業で得た知見をどのようにカリキュラムに反映させるか。この検討を，実験授業と並行して行いました。たとえば，学生へのアンケート調査，教員同士による専門家を招いての振り返りは，どの実験授業でも毎回の授業終了後に行いました。また，最後の授業では学生にも振り返りを行ってもらいました。ただ，「身体をひらく，心をひらく」の場合，振り返りの時期を敢えて最後の授業から2週間後に設けました。最後の授業で創作発表に取り組むと，学生はとても感動します。冷静に振り返れるように，時間を空けたわけです。

授業時間についても検討しました。通常の授業期間中は1コマ90分間が基本ですが，「身体知」教育の取り組みでは活動の都合上，これを伸縮させる必要があります。そこで，90分間という枠に比較的捕らわれずに済む，長期休暇中の夏季に集中講義として行うことにしました。本学では集中講義はあまり認められなかったのですが，交渉の末に可能にしました。また，各分野の専門家に示していただいたメソッドを自在に用いて授業を進められる教員の育成法，座学と関連させた「身体知」教育のカリキュラムの作り方についても検討し

ました。

こうした検討の結果、「身体知」教育は2010年度にカリキュラム化され、「身体知」という教養研究センター設置講座になりました。現在「身体知『創造的コミュニケーションと言語力』」、「身体知・音楽」、「身体知・映像」の三つの講座があります。「身体知『創造的コミュニケーションと言語力』」は夏休みの集中講義で、「新しい文学教育」の後身です。また、教養研究センター設置講座以外に、個々の教員も「身体知」教育のメソッドを用いた授業を行っています。「英語ドラマ」、「精読と創作『アーサー王物語を読んで創作しよう』」、「エディティング・スキルズ」、「『文学』日吉ポエトリー・フェスティバル」、などがそれらの例です。

「身体知・音楽」の最後の授業では、本学の藤原洋記念ホールという音楽ホールで成果を発表しています。

ご覧いただいているのは、「英語ドラマ」の授業風景です。こちらも12月には一般に向けた公演を行っています。

次の写真は、左が「『文学』日吉ポエトリー・フェスティバル」、右が「精読と創作『アーサー王物語を読んで創作しよう』」の授業風景です。「精読と創作『アーサー王物語を読んで創作しよう』」では、ただ物語を創作するだけでなく、創作した物語を製本して一冊の本にするとところまで授業で行っています。

「身体知」教育の最も新しい授業が、「身体知・映像」です。本大会のワークショップでは、この授業のメソッドの一部をご紹介しますほか、授業担当者の一人、本学グローバルセキュリティ研究所特任講師の坂倉杏介が研究発表を行いますので、皆様、ぜひご参加ください。「身体知・映像」では、アカデミック・スキルとして視覚言語を扱います。私たちが何気なく見ている映像も、かなり計算されて作られています。その読み解き方を学ぶ授業です。その過程で、文学、演劇、そして映像の、表現媒体としての相違点についても学習します。さらに、映像作品も実作します。映像は大人数による共同作業によって作られますから、他者との衝突、コンフリクトは不可避です。それらを通した共同学習を体験させようという狙いがあります。

前期は3回のグループ作業を行います。監督や脚本、撮影、音声、編集、スケジュールなど、各回で違った役割を体験し、自分に合った役割を見つけます。

映像制作には、妥協がありません。監督は自分のイメージ通りの演技ができるまで役者にOKを出さず、カメラマンは希望の映像が撮れるまで何回も撮り直すといった具合です。また、脚本の最初から最後へと順番通りに撮影するわけではありません。ストーリー上つながらのシーン撮影が続くことがありますから、役者も感情移入が大変です。演劇での演技経験がある学生でも戸惑います。このように、他者とも自己ともコンフリクトを繰り返すわけです。

ポートフォリオは、前期に2回書かせます。1回目は、自分と向き合っただったか、共同作業で自分と他者の関係はどうだったのかというように対自と対他の観点を与えます。映像作品を作った後に書く2回目のポートフォリオは、自由記述です。1回目のポートフォリオを参照しながら、自分がどのように変わったか、成長したかを書く学生が目立ちます。

最後に、「身体知」教育の課題点についてお話しします。まず、メソッドの応用が難しいということです。汎用性を高めることに課題があります。次に、担当教員への負担が大き

いということです。学生が創作し、それを発表するわけですから、教員にはどうしても授業の時間外で指導する必要が生じます。また、指導には担当教員の個性が強く反映されます。学生の前で教員も自分をさらけ出せれば良いのですが、なかなかそうできない教員もいます。さらに、人文系以外の学問への応用についての実践不足、大勢の学生への授業提供が難しいこと、授業・発表の場所の不足といった課題があります。

このように、本学の「身体知」教育は発展途上です。多くの方がアドバイスをくださいますと幸いです。

ご清聴ありがとうございました。

アカデミック・スキルとしての身体知

慶應義塾大学での実践

2014年9月4日
初年次教育学会第7回大会

慶應義塾大学 横山千晶

1

アウトライン

1. 学生の抱える問題
2. 「身体知」の見直し
3. 慶應義塾大学での実例

2

「理解する」とはということか？

3

学生の抱える問題(1)

- ☆表現能力の低下
 - * 理解したことを再び自分の言葉で表現できない学生
→要約、批判、自らの意見構築の難しさ
 - * 視覚情報の偏重
- ☆体感の必要性
 - * 「腑に落ちる」経験の欠如
 - * 感動体験とは何か:「よかった」という感覚だけで終わる
- ☆心とからだの問題
 - * 感じたことを表現することができない学生たち
 - * セルフ・アサーションしない学生たち
 - * 衝突を避ける学生たち

4

学生の抱える問題(2) 「理解する」とは

- ・どうやって自分の立場を築き上げるか
自己という他者と向き合う
- ・どうやって異なった価値観と折り合いをつけるか
他者と向き合う
- ・他者や他の意見とつながることによってどのように解決・あるいは提案へと向かうか
共有される知を試行錯誤しながら見出す

5

新たなスキル

- ・自分の意見を持つ
- ・他者とぶつかる
- ・他者と協力して解決へとつなげる

6

新たなスキル 論理・感情・共感のプロセス



- ・LOGOS 論理
- ・PATHOS 感情・感動
- ・ETHOS 共感・倫理

→これらのつなぐツールとして
新たな知を考える

7

慶應義塾大学教養研究センター基盤研究 「身体知プロジェクト」



☆2005年発足

☆目的

- * 身体知を理論的・学際的に考究する研究会の開催
- * 実験授業を展開し、理論を確かめる

☆成果

- * 外部の研究者・実践者につながる
- * 理論に基づく教育モデルを実験し、カリキュラム化する

8

「身体知」の見直し:3つの軸



- ・ 第1の軸
言語—非言語
- ・ 第2の軸
視覚—非視覚
- ・ 第3の軸
場と時間の共有

9

身体知のメソッド



その1. コンフリクトを作り出す

- ・ 自分とのコンフリクト
今まで経験したことのない自己表現と向き合う
- ・ 他者とのコンフリクト
セルフ・アサーションのあり方を考える

その2. コンフリクトのあとに共感を作り出す

- ・ 共同による新しい表現の創出と発表

その3. その過程を意識させる

- ・ ポートフォリオの活用

10

実践ステップ1 実験授業 「体をひらく、心をひらく」



- ・ 2006年度「体をひらく、心をひらく」
- ・ 2007年度「アートで体をひらく、心をひらく」
- ・ 2008年度「体をひらく、心をひらく その3—ボクってどこにいるの？」

読むことば以外の表現法を
使って自分を表現する
ことで、新しい自分と出会
い、他人とつながる



11

自己との対峙の留意点



- ・ ひらかれた心をどうやって受け止めるのか
→専門家とのコラボレーション
- ・ 体得された「気づき」の恐ろしさを意識させること
→歴史の中での身体の扱われ方に注目させる



それぞれの授業で応用可能なアプローチを探る
→2007年度からの「新しい文学教育」へ発展

12

実践ステップ2 実験授業 「新しい文学教育」



- ・大教室の文学の授業とタイアップ
- ・「体をひらく、心をひらく」の講師陣
- ・夏休みの1週間を使った集中講義
- ・計30名のさまざまな学年と年齢層の履修者
(通信教育過程の
学生への呼びかけ)



13

「新しい文学教育」で目指したもの



- ・視覚表現や音楽に敏感な若者特有の身体感覚をリテラシー教育につなげる:音読の大切さ
- ・「現代思想」的なものの見方、「文学理論的」なテキスト解釈術を育んだ上で、それを身体的なものと繋げてゆく:座学と身体表現を結ぶ
- ・テキストを読み込むことで、サブテキストの物語に気づかせる



14

2008年『ジョン・ボールの夢』を体感する 19世紀の英文学

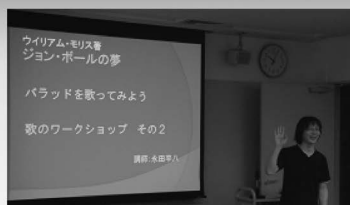
ウィリアム・モリス作:イギリス中世の農奴の一揆がテーマ



- ・キーワードの設定:“fellowship”と21世紀の学生たち
- ・ストーリー・テリングや謡、バラッド、演説、吟遊詩などさまざまな「言語表現」の可能性
- ・戸外を生かした授業 (アーチェリー体験)
- ・アーティスト・歴史学者・音楽学者・
体育教育学者とのコラボレーション



15



16



17

自己発見と共同学習 自己表現と同時に他者と協力して発表



18

実践とディスカッション 研究会での話し合いと理論構築



- どのように「身体知」の重要性を説得するか
- 身体を通じた経験をどのようにして再び座学への知へとつなげていくか
- どのようにほかの科目に応用していくか
- 培われたコミュニティをどのように知的共同体へとつなげていくか
- より多くの学生にどうやってアピールするか
- 単純な世界観や物語へとつながらないようにするために次のステップをどう用意するか
 - アンケート調査と各授業のあとの振り返り
創作発表の後で、時間を置いての振り返りセッションの開催

19

カリキュラムとしての課題



- 時間
一年を通して学べる環境づくりと通学生と通信生の出会いの場とする
- 教員の養成
専門家やさまざまな人々の協力をへて得たメソッドを教員が教育に自ら応用
- 座学の授業との関係
複合的な知を見据えたカリキュラム作り
2009年文部科学省 大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム『身体知教育を通して行う教養言語力育成事業』を経て、2010年にカリキュラム化

20

設置講座「身体知」



- 身体知「創造的コミュニケーションと言語力」
- 身体知・音楽
- 身体知・映像
- その他 教養研究センター関連の身体知講座
英語ドラマ
精読と創作「アーサー王物語を読んで創作しよう」
エディティング・スキルズ
「文学」日吉ポエトリー・フェスティバル

21



22

「身体知・音楽」の発表風景



23



24

英語ドラマの練習風景



25

← 日吉ポエトリー・フェスティバル



精読と創作「アーサー王物語を読んで
創作しよう」



26

身体知・映像



- 視覚言語を新たなアカデミック・スキルとして身につける
- 視覚言語と文学言語を融合する
- 表現媒体としての文学・演劇・映像の違いを体験する
- 視覚芸術は「共同作業」であることを体感する

27

他者との衝突と共同学習 「身体知・映像」



- グループ作業と明確な役割分担
前期は3回のグループ作業
脚本・監督・カメラ・音声・編集・スケジュールと異なった役割を体験し、自己と向き合う
- 妥協を許さないセルフ・アサーション
自己表現と他者との協同制作
- ポートフォリオによる自己観察
前期は2回。1回目は観点を与える。2回目は自由記述

28



29

「身体知」の問題点



- メソッドの汎用性の難しさ
- 担当教員への負担
- 内容は担当教員の個性によるところが大きい
- 人文系以外への応用についての実践不足
- 大勢の学生への提供の難しさ
- 場としてのハードの不足

30



ご清聴ありがとうございました

横山千晶 chacky@a8.keio.jp
慶應義塾大学教養研究センター
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>